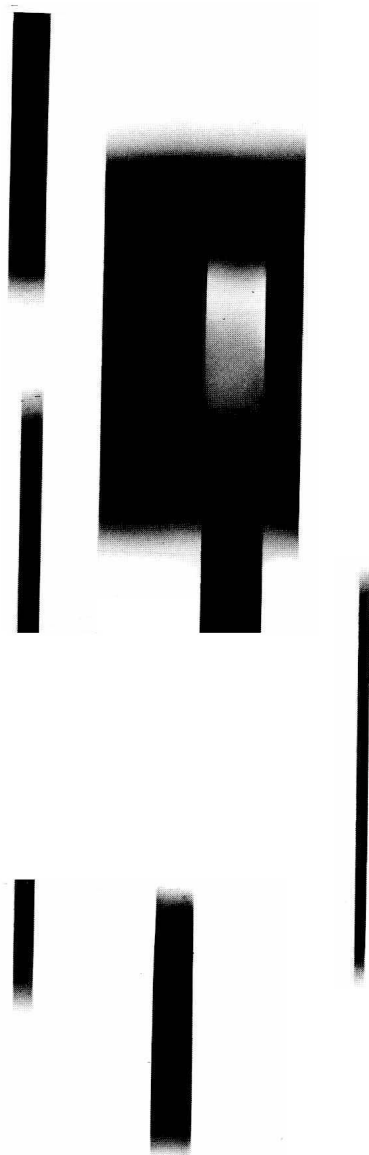


鐘の鬼

清水一行

鐘の鬼



清水一行

サンケイ新聞社

鐘 の 鬼

清水
一行著

©

〈検印省略〉

昭和44年5月1日発行

定価三八〇円

◇

発行者 田 村 彬

印刷 株式会社堀内印刷所

製本 田中製本印刷株式会社

発行所 サンケイ新聞社出版局

東京・中央区江戸橋一の七 (103)

大阪・北区梅田町二七 (530)

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

目次

垂直結合

猜疑心

消毒

手籠め

正論

縛り

按摩

まぼろし決算

合併採算

通報

秘書

不信

7

17

28

39

50

60

71

81

92

103

114

125

滴の膜 破談 直轄 延期 新地 地位 權威 撤回 条件 白紙 団交

246 235 225 214 202 192 181 169 158 147 136 0

麴
谷
宏

鐘
の
鬼

垂直結合

この数年間、坂上祥三は異常な猜疑心さいぎしんに憑つかれた大淀紡績社長おほよど西原万治の信頼を外さぬよう、強く自分につなぎとめておくことにだけ絞って、すべての行動を組み立ててきた。

たとえば一カ月前からのヨーロッパ旅行にしてからがそうだった。

旅行の名目は、二年前、西原万治がパリに住む長子修一を訪ねたとき、ほとんど独断で提携の契約を結んできた、世界的デザイナーの、クリスト・デオリーと、提携についての再検討を、話し合うためということになっていた。

しかし、この坂上祥三のヨーロッパ旅行に、西原万治はまったく別な期待を寄せていたはずである。その証拠に西原は、坂上がパリへ着いてからというものの、三日に一度は彼のホテルへ電話をかけてきた。

「クリスト・デオリーはどうですか」

国際電話で西原は、きまってそう聞いた。

まさか伴の修一はなんと言っている。日本へ帰りそうか、或いはまだその気にならないのかといった、私的な問題を明からさまに聞くわけにもゆかなかったからに違いない。

「昨日一緒にカレーの方までドライブに行つてまいりました。慎重に打診をつづけております」

坂上もその都度、クリスト・デオリーとの折衝経過ではなく、西原修一と話し合った状況を、詳しく話すようにしていた。

関西紡績業界の名門、大淀紡績社長の御曹子である西原修一は特殊自動車の愛好者で、一種のスピード・マニヤだった。そこで彼はすでに十年以上も、パリを中心としたヨーロッパの各地を渡り歩き、気ままな生活をしている。

そんなくらいだから、修一は威力あるスポーツ・カーにしか興味がなく、スピード以外のことにはなにも情熱を感じなくなっており、大淀紡績社長の後目を継ぐ意思がない。西原万治はそのことに悩んでいた。

明治十九年の創立で、やがて八十年を経過しようという、屈指の歴史と伝統を誇る大淀紡績は、もともと日本紡績業の草分けであり、西原の同族企業ではなかったが、現在の西原万治の絶対的な支配力をもってすれば、修一を自分の後継者に仕立て上げることは、不可能ではないはずだった。そこで西原は、一年に三度も四度も渡欧し、修一に会って説得する。

だが、結果はいつもきまっていた。そのため西原は失望し、いたずらな焦燥を深めて帰国するだけだった。

西原は、自分に代って修一を説得する適任者を欲しがっていた。そんな矢先に坂上が、重役会でクリスト・デオリーとの折衝に、ヨーロッパへ出張したいと提案したのである。坂上は、修一を説得するためとは一言も言ってはいなかったが、西原は、坂上なら修一を説き伏せてくれるに違いないと思った。

坂上としては、西原の反応を読みこんだ綿密な計算の上に立ったヨーロッパ旅行なのである。といつても、坂上の説得にたやすく応ずる相手でないことは、初めから承知の上だった。

ところが、三月上旬の何度目かの西原の電話は、それまでとはまったく違っていたのである。

「急なことですが、日生^{にっせい}レーヨンと合併することになりました」
いきなり西原が言った。

「君が帰ってから決めようと思っていましたが、安川銀行の岸本頭取が非常に熱心なものですから、急遽合併契約の調印に踏み切ったんです。いろいろと問題が多いことは知っていますが、一応ぼくに採算と見通しは立ててあります」

坂上には、寝耳に水の事態である。なにしろ三日前の電話では、それらしいことはなにも言わなかったからだ。

「急だから驚くのも無理はないと思うが、一応今日、覚え書に調印して発表するつもりです」

「今日ですか……、それで合併の条件はどうなっておりますか」

「ま、対等というわけにはゆかんが、十対六ぐらいでどうかと思つてね」

「え、十対六！ それは……」

ばかな、と、思わず口許まで出かかった言葉を、坂上は辛うじて飲みこんだ。五対一か、或いは十対一でも、比率はいくらまで下げてでも通用する相手ではないか。

「この際大乗的な見地に立ってということですか」

「わかりました。それで従業員は？……」

「ぼくは個人的な理念として、首切りはしなうと言っておきました。ま、口約束ですが」

「日生レーヨン六千人の従業員全員を引き取るのでしょうか……」

二重の驚きに、呆気にとられて坂上が聞くと、もちろんだと、西原は押しかぶせるように答えた。

すべての面で、やり過ぎともいえる西原万治の独走は、いまにはじまったことではない。かつてはそのためにも西原棚上げのクーデターが、大淀紡績重役会で起こったことがあり、坂上達西原腹心の社長復帰運動で、再び社長に返り咲いてからの西原は、絶対的なワンマン体制を強化し、人間不信ともいえる猜疑心から、逆らう者、疑わしい者は、容赦なく追放した。

この西原万治の決定には、大淀紡績常務取締役で、社の内外から西原の懐刀とみられている坂上祥三をもってしても、たやすく異論をさしはさむことは許されなかったのである。

「どう思いますか」

沈黙した坂上に西原が聞いた。坂上は深く息を吸い、それからゆっくりと「詳細をお聞きしないかわかりませんが」と、口を切った。

「あらゆる繊維を包括した総合紡績会社への躍進は、社長年来の持論でもありますし、そういう意味では、時宜に適したご決定だと思います……」

この場は一応西原をかわし、坂上は電話を切ると同時に、早速帰国の準備にかかった。

坂上祥三は、翌朝一番の便で、パリのオルリー空港を発った。

パリ・東京間の時差は約八時間、香港を通過したのは昼過ぎで、機内のアナウンスが、あと三時間

足らずで羽田国際空港に到着すること、折から大陸の高気圧が張り出して、日本の上空は雲もすくなくはずだから、空からの眺望を楽しんでもらいたいと告げた。

だが坂上には、空からの眺望を愉しむ心のゆとりなどなかった。

百五十億円の資本金で、年商千五百億円、大阪に本社を置く大淀紡績は、日本の紡績産業のトップメーカーの地位にあるとはいえ、斜陽の綿紡を主力に発展してきた会社であるだけに、総合化を推進する経営には、いくたの曲折があり、ナイロンやポリエステルなどの合成繊維部門を強化、漸く前途にたいする見通しを掴みつつあったが、なお整理を必要とする兼業部門をいくつか抱えている状況にあった。

一方の日生レーヨン二十五億円の資本金で、年商は三百億円、本社は東京にあり、スケールは大淀紡績の五分の一。

ところが、日生レーヨンの極端な資産内容の悪さは、繊維業界で誰知らぬ者のない周知の事実で、主力製品のアクリル系ベスレンがなかなか軌道に乗らず、過剰設備を抱えたスフ綿も、部分的な設備廃棄が問題になっているくらいだったから、成長力に疑問があるだけではなく、経営は深刻な不振に悩んでいた。

大手の合成繊維メーカーの中で、株主に配当も払えないでいるのは、日生レーヨン一社で、主力の安川銀行も、日生レーヨンにたいし、見切りをつけたがっていると噂されていた。

なお兼業部門の整理を必要とする大淀紡績が、ボロ会社にも等しい日生レーヨンを、いま慌てて抱え込まなければならぬ理由は、どこにも見当たらなかった。しかも、市況最悪期に、相手を思うさ

ま買い叩くというならともかく、十対六という合併条件から見ると限りでは、救済合併の色彩が、なお強く感じられるのだった。

——いったい合併のメリットはなんだ。

坂上は懸命に考えつづけた。彼の知る限りでは、ナイロン、ポリエステルを持つ大淀紡績が、日生レーヨンのアクリル部門を傘下に収め、三大合繊を揃えるということ以外に、なにも考えられない。しかも急いで三大合繊を揃えなければならぬ理由は、どこにもなかったのである。

空中状態がよく、JALのジェット機は、予定より早く午後四時に羽田空港へ着いた。

税関をすませ、ゲートに出た坂上に、大阪梅田の本社から駆けつけた土田敦秘書室主任と、東京支社長の牧原弘市が、緊張した面持で走り寄った。

「発表の内容は」

いきなり坂上が聞いた。出迎えの二人には予定を繰り上げた坂上の帰国の意味は、もちろん推察がついている。

「合併比率は十対六、六千人の日生レーヨン従業員は全員引き継ぎ、日生レーヨンの寺林二郎社長は、合併後うちの副社長に就任するというものです」

取締役の牧原が、要領良く説明した。

「副社長か。集中豪雨のような気前の良さだ」

坂上は苦笑した。

「この一ヵ月ほど、日生の寺林社長が大阪へちょくちょく見えましたので、ベスレンの売り込みだと

ばかり思っておりまして。重役会も寝耳に水だった様子です」

土田が言い、さらにつづけて、「これこそ紡績から合繊へという、垂直的結合だ」と新聞記者に語った西原万治の談話を、牧原が伝えた。なにをするにもキャッチ・フリーズをつけたがるのは、西原の癖である。

「御予定は」

長身でプロポーションの良い土田が聞いた。彼はいつもきちんと調髪し、服装にも有力大会社のサラリーマンらしい品位を誇示する隙のなさが窺えた。その点は牧原にも共通していたが、坂上はまったく正反對で、無造作に着た紺のダブルは、十四時間に及ぶパリ・東京間の、旅のせいとのも思えぬ襟のゆがみを、まったく気にする風もなかった。

その上、五尺五寸足らずで二十貫という、横に広い坂上の体軀は、お世辞にもスマートとは言えず、運動不足を物語る脂肪の厚さで、小さな顎がくびれ、その癖口許に少年のような愛敬があつて、これが四十三歳で新進の、大淀紡績常務取締役とは、誰にも見えなかった。

ただ、弱い視力をカバーするための薄く色のついた眼鏡が、ただ者ではない不気味さを漂わせていた。

「日生レーヨンの寺林社長に会えるかな」

不意に坂上が言った。土田と顔を見合せた牧原が「いますかどうか」と首をかしげる。

「電話をしてみます」

土田が一度持った坂上の荷物を置き、赤電話に走った。

車が高速道路へ入ってからすぐ「今度のこと、常務はどう思われますか」と、遠慮勝ちに牧原が聞いた。

「みんなはなんと言っている……」

「わたしには本社の反応はわからないのですが、東京に限って言いますと、ただ意外の一言です。果してその必要があるのかどうかという……」

社内の当惑を、牧原は意外という表現で告げた。それ以上のことは、西原万治社長の完璧な支配体制下にある大淀紡績では、口にすることが許されない。

坂上は助手席に乗った土田秘書室主任に「本社の動きは」と、聞いた。

「企画室次長の棚橋さんが、日生レーヨンの財務諸表を、詳細に分析しはじめました」

具体的な反応には触れず、土田もさり気なく答えた。棚橋は坂上の有力なブレーンだったから、帰国した坂上の合併反対を予測し、準備にかかっているらしい気配が窺えるのだった。

高速道路を江戸橋で抜け、車は日本橋通りを逆に戻って、七階建ての日生レーヨンビルの前で停った。荷物を残し、三人がビルへ踏みこんだ時、不意に坂上は足許に振動を感じてよろめいた。

「地震ですね」

土田の言葉に「そうらしいね」と坂上は無表情で答え、かまわずエレベーターに乗り込んだ。上では寺林二郎日生レーヨン社長が、羽田からの連絡で廊下まで社長室を出て、坂上祥三を迎えた。

「いつヨーロッパから……」